

き病も其の経過中に不慮の障碍を起して、不治難治に陥り、遂に非命の死に斃れるが如き者の随分多いことは周知の事實である、人生の悲惨も亦こゝに至りて極れりと謂はねばならぬ、これが下級の窮民であるならば、濟生會或は慈惠病院に施療救治を請ひ得らるゝ便宜もあるが、中流社會の末班に列する彼等にては、固より這般の恩典にあづかることが出来ず、又假令恩典を受け得るにしても其の體面を重んじ、家名に顧みて施療券を貰ひ受ける氣にはなれない、さればと云つて、多額の診察料薬價を醫師に拂ふのは一家の經濟が許るさなないから、一時抑への賣薬を服するもの亦已むを得ない次第である、又其の中には何よりも生命が大事だと思つて家財を賣却し或は借金をして醫師にかゝる者もあるが、併し幸ひに其の病氣は平癒しても、後に残る經濟的苦痛のために又もや身心を苦しめ、所謂人參飲んで首縊るやうな悲惨な境遇に陥る者も尠くない、無論廉恥心のない構着千萬な奴は、薬價診察料を踏み倒して醫師に迷惑をかける者も多いが、併し正直眞摯なる社會中流の者の中には、均一制度の薬價に苦し

み、醫者を聘したくても聘することが出来ずに、あたら病牀に呻吟する者の多いことも亦掩ふべからざる事實である。

二

私共の常に不満に堪へないことは、政府の當局者を始め朝野の有力者が、下層階級の救治にのみ注目して、其の實之よりも一層重大なる經濟的危機に瀕しつゝある中流社會の苦痛を逸してゐるとである、下流の細民を施療する救恤機關は可なり多く出来たが、中流社會の下層に位せる者に對して適當なる救治の方法を講究し、又は之を實行せんとする者の未だ世に現はれないのは、社會政策上より見ても又公衆衛生上より見ても誠に慨嘆すべき次第である、固より下級の窮民に對する救治法と中流社會の末班者に對する救治法とは、自ら異なる所があり同様に取扱ふことは出来ない、自己の體面なり一家の名譽なりを重んずる社會中流の輩に對して、下流社會と同様に施療的處置を行ふが如きは、到底不可能の話であるから、他に特別の救治機關を設置せね

ばならぬ、それは何かと云ふに、完全なる安價療病機關である。

人の知るが如く近年以來、二三の大都市に實費診療所とか平民病院とか稱する者が出來て、門前市をなしてゐるやうであるが、併し此等の療病機關は私立の營利組織であり、又其の内部に非難すべき種々の缺點もあつて、眞に中流社會の病者に適切なるものと認定する譯にはゆかぬ、實費といふ名はあつても其の實は必ずしもさうで無く、單に實費診療の名によつて多くの病者を吸収し、莫大の利益を擧げてゐるやうな名實相一致せざる者も見受けられる、此の如きは社會を欺瞞する一種の詐欺的行爲で、斷乎として排斥せねばならない、併しそれでも、多數の病者が之を歓迎して診療を受けにゆくのは、一般醫師の診察料及び藥價が、中流社會の末班者に對して高きに過ぐるが爲めである、各地醫師會規定の均一的藥價が富者を利するだけで、中流以下の者に甚だ不利益であることは、夙に一般社會の認めてゐる所である、勿論醫師會の中には貧民に限りて、藥價診察料を輕減すべきことを規定せる者もあるが、併し薄給生活の

中流社會に對しては何等の規定もなく、矢張り紳士富豪と同様に取扱つて同等の報酬を要求することになつてゐる、醫師會としては蓋し已むを得ざることであらうが、併し此の如きは時代の要求に齟齬せるの甚だしきもので、之を社會政策上より見ても、看過すべからざる失當の措置である、さりながら、今日の醫師會に向つて均一的藥價制度の革新打破を望むが如きは、恰も木に縁て魚を求めんとするの類であるから、須らく他の方法によつて、社會中流のため時代の要求に適せる特殊の療病機關を設くるの要がある、併し必ずしも之を各地に特設するには及ばない、從來の府縣立病院の營利制度を改善して社會中流の安價療病機關に變更すれば、それで足れりである。

三

府縣立病院即ち所謂公立病院は、東京府を除けば、今尙ほ全國樞要の都會に設置せられ、或は地方費の補助を受け或は獨立經濟制度の下に經營せられてゐるが、併し今や此の如き公立病院の必要なことは夙に識者の力説する所である、蓋し明治初年よ

り二十年頃に至る迄は、歐洲の文明を輸入する方便の一として洋醫學を普及せしむるの必要上、政府の奨励又は地方人民の奮發によつて都市に公立病院を設けることとなつたのであるが、其の後地方費の都合等のために自然廢滅に歸した者も少なくない、又他の一面に於ては、醫育機關の増加及び醫術の進歩に伴うて累年醫師の數激増し、私立病院亦到る所に起りて病者の診療に殆ど不足を感ぜぬやうになつた結果、最早や公立病院を存置するの要なきことを唱道する者各地に起り、今や醫界に於ても一の宿題となつて論議せられつゝあるが如き有様である。

今日諸府縣に存在する公立病院の中、其の規模の比較的に大なるものは多くは、官公私立の醫學専門學校に隸屬し或は其の地に尙ほ適當なる大私立病院の無いため辛うじて其の命脈を保ち、其の存在の價値を認めらるゝに過ぎない、明治二十年時代の頃迄は歐洲の醫術未だ充分に普及せずして開業醫の數も尙ほ少く、且つ設備の完全なる私立病院も稀であつたが、既に今日になつては當時とは全く其の状態を異にし、地方に

よりては公立病院よりも寧ろ私立病院の方が遙かに優つてゐる者もあるから、此の如き地方に於ては、いつまでも公立病院を存置するの要は無い。

近年以來醫師の年を逐うて増加し、同業者間の生存競争益々激しくなつて生活難開業難を訴ふる者愈々多きを加へ、就中大都會に於て這般の現象は最も顯著になつてきた、而して醫師の中には、公立病院の存在を以て開業醫の生活を壓迫する原因の一となし、之を廢止する時は幾分なりとも醫師生活難の程度を緩和ならしむることが出来ると信じ、頻りに其の廢止を主張する者もある、此の如き説は固より開業醫の自利主義より出でたことであるが、併し今や開業醫到る所に立關を張り、又私立病院も澤山に出來て其の設備亦左程の缺陷も無きやうになつた大都會に於て、いつ迄も營利制度を墨守する公立病院を存置するが如きは、實に無用の事たるのみならず、開業醫の生活を益々困難ならしめ、延いて醫風の頹廢を招致するの虞がある。

又他の一面より觀れば、府或は縣といふ自治的公共團體が、府民縣民の一部分なる

開業醫と對抗し競争するやうな營利病院をいつ迄も存置し、醫師の生活を脅かすのは、公立病院たるの目的に悖反せるもので、此の如き制度は一日も早く打破せねばならぬ、但し僻陬の地方で、今尙ほ學識實驗に富める醫師が少く或は相當の設備を有する私立病院に乏しい處ならば、無論公立病院を存置するの必要もあるが、既に多數の開業醫及び私立病院を有して同業者間の生存競争激甚となりつゝある大都市に於ては、例令公立病院を殘し置くにしても、其の制度を根本的に改善して、眞に公立病院たるの本色と面目とを發揮するやうに變更せねばならぬ。

四

今や下流社會の施藥救療事業には、資金何千萬圓を擁する濟生會なる者あつて、既に其の救療機關も設立せられ、又私立の慈惠病院も富豪や有志者の手によつて比較的規模の大なる者が出來上つたから、貧民中の病者は何時でも救療し得られるやうになつた、固よりそれは二三の大都市だけに留まり、全國に於ける貧民の齊しく施療救恤

の恩典に浴するまでには行かないとしても、醫師會の中には特に貧民に限りて醫料を輕減する處もあり、又濟生會に就て施療券の交付を請求し得られるから、下層階級の施藥救療には、別に甚だしい障礙も無く且つ自己の名譽も體面も考へざる貧民のことであるから、自ら進んで大學病院や、醫專附屬病院の施療患者となる者も多い、之に反して中流社會の者は氣概があり、廉恥心もあるがため、假令生活難を訴へても、無學の貧民に伍して施療券頂戴に出掛けたりする様な者は非常に稀である、無論其の中には脊に腹は換へられずと、一身一家の恥辱を忍んで施療救恤を受けにゆく者もあるには相違ないが、併し瘦ても枯ても、普通教育の教員たり、官廳の吏僚たり、銀行會社の事務員たる職にある者が下級の窮民と同様に施療患者となるが如きは、實に人生悲惨の極で、苟も一片の同情心ある者なれば、此の如き悲惨の狀を傍觀するに忍びないであらう、されば彼等に對して施療患者扱ひをするが如きは其の面目を傷つけ社會的に自殺せしめるやうなものであるから、假令彼等の悲境にあるとも、下流社會の

ものとは多少異なる救治的方法に出でねばならない、私は此の點に於て公立病院の全部若くは大部分を社會中流のための安價療病機關に改革せんことを望むのである。此の如く論ずれば醫師社會は必ず猛烈に反對するに相違ない、そんな事をされては醫師の自滅である、社會中流中の薄給者、困憊者は、之によつて多大の經濟的利益を受けらるであらうが、醫師に取りては著しく病客が減少するから、非常な損害で、生活に窮せねばならぬと絶對的に反對するにきまつてゐる、併し此様な反對は一種の泣き言に過ぎない、私等の主張する安價療病機關は、社會中流の下層階級のみを診療するだけで、決して中流社會の大部分を診療する機關では無い、試みに思へ、物價の年々を逐うて暴騰しつゝ、あるの今日、一日の所得金二圓内外を出でざる者は、假令中流社會と云つても、其の實は日傭ひの勞働者の境遇と殆ど大差は無く、有體にいへば下流社會に屬すべきものである、併し彼等には教育があり、品格があり、名譽心もあり、廉恥心もあるから、經濟的生活の上では貧者であつても、社會的地位上、下流人民と

同等に取扱ふべきで無い。醫師にして彼等の心情を洞察すると共に境遇の悲惨苦痛に同情を寄する一片の義氣があるならば、能ふだけ其の經濟的生活の苦痛を緩和するやう、特別に藥價診察料を安價にして其の病を癒すのが、仁術を以て世に立つべき醫師の徳義ではなからうか、併し醫權を喋々する今日の醫師會及び一般開業醫に向つて到底此の如きことを期待することは出来ない、それ故私等は自治的公共團體たる府縣の公立病院の制度を改めて、特に中流社會の下層階級のために完全なる安價療病機關を設置して貰ひたいのである。無論之に對しては醫師社會が反對するに相違ない、併し社會政策上よりは是非共時代の要求に應ずべき安價療病機關を公費にて設立し、中流を救濟保護することは方今の急務の一である、假令醫師社會の壓迫があり、反對があり、愁訴があつても、決して之に耳を假すことなく、飽まで斷行して貰ひたい。

醫學博士論

醫學博士が、博士中の大多數を占めてゐることは、既に人の熟知せる通りで、年々歳々増加すること、雨後の筍の如く、學問の進歩に伴うて學者の増加し、博士の殖えるのは當然の現象としても、醫學博士のみが特に目立つて激増するのは、異様の感の起らぬでもない、世人は之を以て、吾國の醫學が他の學問に比して顯著駁速の進歩を遂げた結果と看做してゐる様であるが、併し吾人の觀る所を以てすれば、吾國の醫學は尙ほ過渡時代に彷徨し、獨逸の醫學を師宗として之に模倣しつゝあるが如き有様で、未だ獨立完全の域に達して居らぬ、五十有餘年來、醫學が吾邦に於て發達開展したことは事實であるが、併し歐洲の醫學と對峙して、世界に學問的霸權を争ふまでの程度に達して居らぬことも、亦掩ふべからざる事實である、此の點より觀れば醫學が他の學問に比して進歩したと云つても、これは單に五十歩百歩の相違に過ぎない、從つて吾國の醫學者が他科の學者よりも、特に學力識見の優つてゐる者とも斷定する譯にゆかぬ、然らば何が故に醫學博士が目立つて多いかと云ふに、それは他でもない、

醫學に於ては容易に實驗材料が得られ學位申請論文を製造し易いことが、其の重なる原因である、之に反して文法科等では、其の學問の性質上、新奇なる論文を製出することが容易でない、餘程多くの載籍を涉獵し、且つ紙背に徹する底の眼光を以て、立論せぬことには、他より見て價値ありと認めらるべき立派な論文が出来上らない、これが文科法科に於て博士の割合に多く出でざる原因である、而して理科農科に於ては、醫學と同じく實驗的の學問である故、學位申請論文は製出せられ易いやうであるけれども、元來専門家が割合に少いから、從つて博士もあまり出でないのである、つまり、醫學博士が他科の博士に比して甚だ多數であるのは、其の學問の性質上論文を製出するの比較的容易なると、且つ醫者の數が他科の學者よりも遙かに多いからである。

醫學に於ては、從來教授會及び博士會より推薦せらるゝ博士は殆ど無く、論文提出に由りて學位を授與することになつてゐる、これは一面に於ては甚だ賞すべきこととて

あるが、併し他の一面に於ては甚だしき弊害缺陷が之に伴つてゐる、それは何であるかと云ふに、基礎醫學に關する論文若くは之を背景とせる論文に非ざれば、殆ど通過するの見込みなく、實際上學力識見に富み且つ非凡の手腕を有する醫家と雖も、這般の論文を提出せざるものは、學位を受くることが甚だ困難である、それ故臨牀醫家でも、病理解剖學、細菌學、醫化學等の如き基礎醫學に關する理論的の論文を提出せぬとには、博士になれぬ故、争うて此の種の基礎醫學的論文をつくるに腐心し、其の本業たる診療上の手腕は、よしや普通の町醫者同様碌々平凡な者であつても、或は更に之よりも劣るが如きものであつても、平氣な顔で、右の論文を提出し、學位を要求する、而して其の論文が首尾よく通過すれば、一躍醫學博士となつて郷黨同僚に誇るを得べく、又大なる門戸を張つて、多大の診察料を收むることが出来る、基礎醫學者が其の専攻する學科の研究論文を提出して、學位を要求するのは、固より當然のことであるが、臨牀醫家でありながら、實際的研究を第二として、同じく基礎醫學上の純

理論的論文を提出し、之に由つて學位を贏ち得んとする結果、實地診療の手腕の向上に勉めずして、腐儒的醫學者の態度に倣ふ者を出す如き弊風が、自然に醸成せらるる様になつた、これ實に論文提出のみに由りて學位を授與する規定になれる醫科に於て吾人の夙に認むる所の弊害の一である、さればこそ『カタラクト』の手術だに能くせざる白面乳臭の眼科醫の如き者も、又癌腫に因する出血性腹水に穿刺術を施して患者を非命の死に斃れしめた無能の庸醫の如き者も、醫學博士となつて、自然に學位の權威を失墜せしめ、世人をして鼎の輕重を問はしむるやうになつて來たのである。抑々吾國の博士なるものは、歐洲に於けるドクトルと同じく學位であつても、併し其の社會的性質に至つては大に異つてゐる、獨逸のドクトルの如きは、云はゞ大學卒業を證するだけの者で、吾國の學士號と殆ど異つた所はない、吾國の醫科大學では、ドクトル申請論文に相當する卒業論文を要求しないが、併し文科等に於ては之を提出することになつてゐるから、つまり吾國の學士はドクトルと同じである、世間ではド

クトルを博士と譯する者も多いが、吾人を以て之を觀れば寧ろ學士と譯する方が妥當である、ドクトルが學位たるの故を以て之に拘泥し、博士と譯するは固より理なきに非ざるも、吾國の博士號は、恰も軍人の金鷄勳章の如きもので、表面では學位とは言ひ條、其の性質に於ては、國家が最高の學者たることを表彰したる金看板である、此點に於て博士なるものは、歐洲の「プロフェッショナル」と同等に看做すべきもので人も知るが如く、歐洲、就中獨逸などでは「プロフェッショナル」と云へば、學問界に於て偉大の權威を有し、世人の尊敬を受けてゐることは、吾國從來の博士と殆ど異つた所はない、然るに「プロフェッショナル」と同一視すべき博士が、吾醫科に於ては單に論文の提出のみによつて、直ちに授與せらるゝことになつてゐるので、前舉げたるが如き弊竇缺陥を來たすやうになる、近年以來醫學博士が年を逐つて増加するのは必ずしも斯學の進歩を具象的に證明するものでなく、論文を提出して學位を贏ち得んとする有象無象が吾醫界に頗る多く、而して此等の者に對して、一篇の論文のみに依つて學位の濫授せら

る、結果である、他科の博士のことは知らぬが、自分共の能く知れる醫科の博士には、喰はせ者が随分多く、花の吉野山ならねど、これはくどばかり吃驚仰天する程の無能低能の輩の見出さるゝことは、實際上掩ふべからざる事實である、一二年間形式的に洋行して、彼の國の大學の助教、講師若くは助手等の歡心を買ひ、其の「アルバイト」を買ひ取り或は他人に執筆せしめたるが如き舶來仕入れのいかゞはしき論文を、吾物顔に提出して首尾よく學位を貰つたやうな者が、お見受け申す所、そんなじよ其處らに随分多くある様である、看よ洋行前までは、醫化學、病理學、細菌學等の基礎醫學上の知識殆ど皆無とも云つて然るべき輩が、洋行後、僅々一二年ならずして病理又は細菌學に關する堂々たる「アルバイト」を持ち歸つて學位を要求し、其の目的を達したるが如き奇異なる事實の少からざることは、自分共の今日まで親しく見聞した所で、醫學博士となつても、其の提出した獨逸文の論文が碌に讀めぬ様な笑止千萬なる博士殿も、可なり少く無い、これと云ふも、畢竟單に論文のみに由りて、學位を濫授する

結果に他ならぬ。

抑々、醫家の中には、學位の肩書に依て、多くの患者を吸収したがる者が甚だ多いから、勢ひ學位論文の製造となり提出となり、實際上では、別にそれ程の學識經驗なき無名の輩と雖も、舶來仕込みの論文を提出して直ちに學位を贏ち得るが如き事が頻出する様になるのである、而して其の結果は多數の後進醫家をして、争うて此の如き渦瀾中に投ぜしめ、實際上の識見及び經驗に乏しくとも、一躍博士となつて、郷黨に誇らんとするが如き突飛な野心を抱かしむる様になり、其の繁資の横流する所、遂に人の子を賊して醫學究竟の目的を閑却せしむるに至つた、慨するに堪ふべけんやである、殊に基礎醫學者でもなき臨牀醫家にして、治療的手腕を第二位第三位に置き、徒らに基礎醫學に關する純理論的研究に腐心して學位を得るに熱中するが如きは、醫學界に取りても、又一般社會より見ても、甚だ好ましくならぬ不祥の現象である。

『學醫必ずしも良醫に非ず、良醫必ずしも學醫に非ず』とはメツテンハイメルの名言

である、然るに世の俗人は博士といへば必ず良醫と信じ、其の門戸を大ならしむるを許すが爲め、學醫即ち良醫なりとの誤謬なる思想を抱かしめ、其の結果、猫も杓子も滔々相率ゐて、實地の技能と直接の關係も無き枝葉の理論的研究に没頭し、之を以て一の大なる誇とまで過信せしむるに至つた、吾人は此の如き風潮を以て、現代に於ける煩瑣的學風となし、醫學本來の目的を閑却するの甚しき者と看做さざるを得ぬのである、學者と社會有用の人物とを混同するのは、畢竟知識萬能を信ずる根本的誤謬に出づるもので、實際醫家として世に立つ者は、寧ろ社會に於ける有用實用の人として、學理の研究に費すべき努力と精力とを實際的方面に振り向けるのが必要である、換言すれば學醫たるよりも良醫となるべきもので、這般の精神なき臨牀醫家は、たとへ博士の肩書があつても、實際社會に於ける無用の長物で、却つて人を賊し世を誤るものと謂はねばならない。

吾人の觀る所を率直に表白せしむるならば、臨牀醫家には必ずしも基礎醫學的の「ア

「アルバイト」を要しない、何となれば臨牀家の本分天職は、寧ろ學理を實際的方面に活用して起死回生の靈術を施すにあるからである、自分共は固より、臨牀醫家の基礎醫學的研究を以て必ずしも無用と云ふが如きものでない、併し實際醫家たるものは、よしや「アルバイト」を有せずとも、學理を應用する手腕に長じ診療の道に精通するならば、十分に其の天職を全うすることが出来る、されば臨牀醫家にありては其の基礎醫學的「アルバイト」の有無の如きは、必ずしき其の人の手腕及び識見を評價すべき標準となる者でない、いかに「アルバイト」を有すればとて、病牀に臨みて患者の生命を救ふの靈術に拙劣なる輩は、到底醫家たるの價値も資格もなく、此の如きものは、寧ろ純然たる學者となりて基礎醫學に轉すべきものである。

醫學、病理學或は細菌學の如き基礎醫學を専攻した者が一朝學位を得るや、直ちに臨牀家に早や變りをして、開業醫となり、醫學博士の肩書を振りまはして患者を吸せんとする様な輩も可なり多く、現に自分の知つてゐるだけでも、數人以上もある

が、此の如きは實に騙世欺人の一種と稱しても決して差支は無い、基礎醫學者が實際的診療の技術に精通せざるにも拘らず、博士の肩書を得たるが爲めに、早速臨牀の醫家に轉じ多大の診察料を要求して憚らざるが如きは自他を欺む世人を瞞着するの甚だしきものである、俗人をして博士の名により、一廉の大醫名醫たるが如くに信ぜしめ、大なる門戸を張つて、偉らさうな顔をして、其の實際的手腕に至つては、平凡碌々たる普通の町醫者よりも劣つてゐるではないか、然るに鐵面皮にも開業をした上、更に適當の診察料を貪はりて恬乎恥色なきが如き實に學者の墮落も此に至つて極れりと謂はねばならぬ、而して斯くも學者を墮落せしむるに至らしめたのは、世俗をして學醫即ち良醫なりとの誤れる思想を抱かしむる様にさした醫學博士の學位である、基礎醫學的「アルバイト」に非ずんば、容易に學位を授與しない當局者の方針が、不知不識の裡に上記の如き弊風缺陷を醸成せしめ、遂に基礎學者までも、墮落せしむるに至つたのである。

吾人は此の點より觀て、單に學位申請論文のみに由りて、直ちに博士號を濫授するが如き弊風を根絶したい、即ち醫學博士の學位論文は必ずしも醫化學、病理學、細菌學等の如き基礎醫學上の論文に限ることなく、臨牀上の論文をも容るゝことにしたいと思ふ、又世には實際的手腕に長じ、名醫大醫と稱して少しも恥づかしからぬ醫家に於て、基礎醫學的「アルバイト」なきが爲めに博士となれぬやうな人も少くない、此の如きは、實に學界の恨事と謂はねばならぬ、たとへ基礎醫學的「アルバイト」を有せざとも、學力及び識見に富み、臨牀上の實際に精しく醫界に名を馳せつゝある醫家に對しては、別に論文の提出を待たざとも、學位を授與すべきこと、彼の文科法科に於けるが如くにしたがい者である。

基礎醫學を専攻したるものにして、博士の學位あるを奇貨とし、臨牀醫家に早や變りするやうな者に對しては、斷乎として學問的制裁を加ふるの要がある、彼等とても矢張り醫師の免狀を有する以上は、法律上之を咎むることは出来ないけれども、實地

診療上の經驗に乏しきにも拘はらず、傲然として斯道に通曉せるが如き名醫顔をなし、世俗の徒を瞞着して學問の神聖を汚すが如き墮落的學者に對しては、何とかして適當なる方法の下に嚴重なる制裁を加へ、基礎醫學者の俗化墮落を防止したいものである、それから尙ほこゝに論じたいことは、從來當局者の學位授與の方針が、吾人の腑に落ちぬことである、先づ第一に擧げたいのは、高等普通教育を経ざる者に對しても、單に其の提出する論文のみに由つて、直ちに學位を濫授することである、これは獨り醫科のみに限つたことでも無いが、學位の權威の爲め、是非共之に就て一言したい、吾國では、學士の稱號は、高等普通教育を卒へて一定の年限間、大學若くは大學と同一程度に於て専門教育を受け、且つ其の卒業試験に及第したる者に對して始めて與ふることになつて居るに拘らず、博士の學位には此の如き規定なく、當局者に於て審査したる論文が單に有益なりとの故を以て直ちに授與することになつてゐる、されば博士といへる立派な肩書はあつても、普通教育をも充分に受けなかつた様な輩が少く

ない、現に醫學博士の中にも濟生學舎出身の者や、往時の乙種醫學校出の者がある、素より天才と普通教育とは全く別物で、天才的學者には必ずしも、普通教育を要しないが、一般の學者には、是非其普通學の素養が無ければならぬ、然るに天才的の學者も一般の學者もゴツチャにして、單に其の論文のみに依り直ちに學位を授與するが如きは、大に吾人の腑に落ちない、普通教育を充分に受けざる學者でも、元來が天才肌で、偉大なる發見、斬新なる研究を遂げたものならば、之に學位を授與するの當然で、彼の野口博士の如き、普通教育の素養乏しき人たるに拘はらず、識者は夙に其の學力を認識し、其の業績を承認してゐるから、博士となつても、誰れ怪しむものも無いけれど、併かし此の如き天才的の醫學者は、實際上甚だ稀有である、されば高等普通教育を受けざる普通一般の醫家に對しては、よしや其の提出せし論文の内容に多少觀るべき者があつても、眞に斯學の進歩に貢獻する價値少きものであるならば、成るべく學位の授與を差し控ふるやうにしたいたものである、學士の稱號でさへ、高等普通教育

の在る者一なければ、之を許るさないので、博士の學位に、之に關する特種の規定の無いのは、吾人の甚だ遺憾とする所である、吾醫界に成金博士と云ふ渾名のついた者が少からぬのは、高等普通教育も受けず、又實際上の手腕及び學力も平々凡々でありながら、一片の論文、ことに舶來仕込みのいかはしき論文に依りて首尾よく學位を贏ち得た者の在るからで、此の如く輩は、よしや世俗間には信用せられてゐても、學問界にては、所謂成り上り者として侮蔑せられ、博士たるの權威を認められて居らないのである。

第二に擧ぐべきは醫學博士なる學位が、之を有する本人の醫學上の知識に相應して居らない様な事のある事實である、今其の最も極端なる一例を擧ぐれば、醫學を修めたこともなき他科の學者に、醫學博士の學位が授與せられたことがある、それは、宮島幹之助氏のこと、同氏は、動物學専門の理學士であるが、元傳染病研究所に於て傳染病に原因的關係ある細菌を研究し、之に關する論文を提出して醫學博士の學位を

授與せられたのである、當時に於ても随分議論のあつた様に記憶してゐるが、元來動物學専門の理學士が、マラリア病の原因たる「プラスモヂウム」等を研究したるが爲めに之に醫學博士の學位を與へたのは、如何に考へても其の當を得ない、吾人の觀る所を以てすれば、理學博士の學位を申請し又は之を授與するが至當である、元來醫學を究めたること無き他科の學者に對し、傳染病の病原たる二三の原蟲類に關する位の論文だけで其の要求せる醫學博士の學位が授與せられ得るならば、若し彼の變態心理の研究者たる福來文學博士、遺傳論を得意とする外山農學博士の如き人々が、之に關係する論文を醫科に提出したならば、宮島氏と同一の理由で、醫學博士の學位を許さねばならぬことになる、さうすれば醫學に多少の關係を有せる理科文科農科等の學者は悉く醫學博士の學位を申請し得べく、又之を授與せねばならぬ譯である、學問の分科は素より親密の關係を有するものであつても、醫學には醫學、理學には理學と、それと特殊の専門的知識と經驗とを要するものであるから、他科の學者に對して、妄

りに醫學博士の學位を授與するのは、専門科學の權威を輕視し、延いて一般學風の墮落を招致するの患ありと謂はねばならぬ、然るに未だ嘗て特殊の學問たる醫學を究めたるとなき動物學専門の理學士宮島氏に醫學博士の學位を許せしが爲め、醫學一般の知識素養なくとも、一篇論文のみに依りて、博士の榮號を贏ち得らるゝやうに思ふ者が多くなり、徒に論文の製造のみに腐心するが如き似而非學者の輩出するやうになつたのは、實際上掩ふべからざる事實で、此の如き墮落的學風を醸成せしめたのは、實に當局者の責任と謂はねばならぬ。

第三に擧ぐべきは、古文書古醫書中の事項を蒐集網羅せる著書を提出して、醫學博士となつた人のあることである、その人は富士川游及び岡崎桂一郎の二氏で、其の眞摯なる篤學者なること、又吾國に於ける醫史專攻の學者なることに對しては、吾人後進の敬重措かざる所であるが、併し學位申請論文として京都醫科大學に提出せし著書は多數の古文書古醫書を涉獵し、精緻周到なる系統的觀察を下したる有益の著書なり

としても、多少醫學的素養ある人ならば他科の學者でも出来ることで、特に醫學博士の學位を授與すべき性質のものでない、富士川氏の『日本疾病史』にして醫學博士たるの價値あるものとせば、『日本及日本人』に東西古今の醫學を歴史的に精叙して綿密なる比較的觀察を下されたる三宅雪嶺先生にも醫學博士を授與せねばならぬ。

以上論じたるが如く、醫學博士の學位が濫授せられて居ることは、具眼者の夙に認むる所で、之が爲め自然に學位の權威が失墜し、識者をして鼎の輕重を問はしむるやうになつたのは、非常なる恨事である、博士といへば世人より博學洽聞の學者として尊敬せられ、國家よりも最高の學者たることを表彰せられてゐるにも拘らず、意外にも其の實に協はざる者の少からざるは獨り我が醫科のみに限つたことでないが、併し此様な有名無實の博士が特に醫科に多いことは、以上舉げたる事實に徴しても明かである、これ畢竟論文のみを見て其の人を見ざるの弊の致す所である、而して今日の博士の中、論文によりて學位を贏ち得たる者を見るに、唯其の専門學科の一部分のみに通

じ、全般の知識に至つては甚だ曖昧模糊たる者が少なくない、内科専門の博士でありながら、結核性腹膜炎の診斷を誤つたり、尿毒症に因する昏睡を卒中と誤診したりした様な飛んでも無き無能庸劣の輩のあるのは、僅かに枝葉の部分的研究によりて、直ちに學位の濫授せらるゝが如き弊風の然らしめた結果である、而して近年以來、這般の傾向が特に甚だしくなつて、有名無名能才凡才の別なく、一篇の論文の提出によりて、學位が總花的に濫授せらるゝが爲め、醫學博士の値打ちが特に著しく下落して來たことは、殆ど掩ふべからざる事實である、勿論俗人の間には、多少従來の惰力を維持してゐるやうであるが、少しでも學界の事情を知つてゐる者は、醫學博士に對して、あまり敬意を拂はぬ様になつた。『醫學博士なんぞが、何十人出來たからとて、また例の病院商賣、廣告用の肩書が殖えた位の感じしか起らぬ』とまで、某雜誌の上で公言した人もあつた位で、學界の事情を知る者は、誰れも此様な感が起る、實にナサケ無いてはないか。

これを要するに、博士中の最多数を占むる醫學博士は、玉石同架、薰蕕混合の有様といふべく、世俗間には兎も角、學問社會に於ける權威の逐次滅失しつゝあることは、到底否認することが出来ない、吾人は此の點に於て深く當局者の猛省を促さざるを得ないのである、かへすくも言つて置く、吾國の博士號は、獨逸なぞのドクトルとは全く其の社會的意義及び價値を異にし、「プロフェッショナル」乃至それ以上の名譽に値する學位であるから、單に一篇の論文ばかりでなく、其の提出者の平素の學力、識見、經驗の他、人格品性、高等普通教育の如何等をも充分に參考し、嚴密なる銓衡を経た後始めて授與する様、注意にも注意を加へられたいものである、殊に醫家は貴重なる人命を左右する神聖の業務であるから、醫學博士の學位を申請する者に對しては特に一層嚴重綿密に銓衡するの要がある、有名無名能才凡才の如何に論なく、一篇の部分的枝葉的論文によつて「プロフェッショナル」の名譽に値する博士號を濫授するが如き從來の弊風は、一日も早く根本的に艾除し、學位の權威の失墜、及び學風の墮落を防がん

ことを、呉れくも當局者に願つておく次第である。

間違だらけの治療終

附 録

滑稽 諷刺 新 醫 道 傳 授

一名大正醫者虎の巻

お江戸の昔、さる皮肉屋が「醫道傳授」といへる冊子をものして、藪井竹庵達にい
ろ／＼の秘訣を傳授したことがあつたが、大正の今日とは全く時勢が違つてゐるか
ら今之を讀んでみた處が、何の役にも立たぬ、これで拙者が、御苦勞千萬にも、新
醫道傳授といふのを書いてみることになつた譯である、これぞ大正醫者の虎の巻、
其の記してある通りに履行したならば、一躍成功の彼岸に達し得らるゝことは、受
け合の西瓜なりと、大に手前味噌をならべて置く。

一 流行醫となる傳授

千里の道も一歩からとやらで、物にはそれ／＼順序と云ふものがある故、學校出の
ホヤ／＼たる 筍 醫者が、一躍流行醫となつて大家然と濟ましかへることの不可能な
るは、今更申すまでもない、然し世の中には裏があり、底には底があつて、あながち
順序立つたものでもないから、新米の 筍 醫者でも、時と場合によりては一足飛びに
流行醫となられぬことも無い、そこがそれ拙者の傳授致さうと存する處、此の匙加減さ
へ、うまくやつたならば 筍 も見るまに藪になつて、よしや、飛ぶ鳥は落とし得ずと
も、蝙蝠位は落とすとも出來やう、兎角世の中は、義理の、徳義の、へちまのと 徒に
腎込みばかりして居ては、所詮成功おぼつかなく、いつも玄關に閑古鳥を鳴かせて、ピ
／＼云ふて居らねばならぬから、思ひ切つて大膽に鐵面皮にあつかましく出掛ける
のが成功の要訣と知り置くべし、法性寺入道前關白太政大臣も三舍を避くるばかりの

澤山な肩書を持つて居らるゝ實業家とか、紳士とか云ふお歴々の方々の素性や經歷や
 らを洗つて見玉へ、今でこそ福富圓滿の相貌をして、まじめに構へてゐると云ふもの
 の、其の昔は輕業帥のそれならなくに危い綱渡りをしてきた身の上、人情、義理、道徳
 も瓢箪も在つたものでなく、面の皮の厚きは、千枚張の鐵は物かは、大膽不敵で押し
 通して、濡手で粟の大儲けをした往時の成金ではないか、これを思へば、世の中は飽
 迄厚顔鐵面皮に自我を發揮して直往驀進するのが成功の母と申すもの、醫は仁術かは
 知らねど、世渡りの方法は不仁術こそ然るべし。

さて流行醫となる秘傳じやが、前申す通り、既に厚顔鐵面皮を以て成功の基礎とし
 た以上は、飽迄此主義で一生涯徹する覺悟が必要である、學校を出ただけの青二歳の
 身であつても、そんな風は腰にも出ださず、都會のまん中に傲然大きな玄關を構へ、
 醫學得業士であるなら、其の得業の二字だけは顯微鏡で見ねば分らぬ程にして、醫學
 士と大きく書き、又校名づきの醫學士ならば、其の餘計な字だけを六號活字よりも小

さくした門標を掲げ、知識階級の患者に對しては、成るべく獨逸語やラテン語を無茶
 でも構はず會話の中に亂發して、わからぬなりに學問の深き才子であるやうに見せ
 かけ、俗人に對しても世間に能く名の通れる諸大家と同輩の格なるが如くに思はせる
 様、青山君があつたとか、北里君が恙うしたとか云ふ風に、一々クン呼ばりをして
 自身で金箔をつけて置くのも、これ亦醫家處世の一要訣、何がさて盲者千人の世の中
 だから、其の馱法螺を真にうけて、信用するにきまつてゐる、あの先生はまだ若いけれ
 ど、中々偉らしい學者じやげなど、やがては一犬虛に吠へて萬犬實を傳ふるやうになる
 であらう、併しそれだけでは、尙ほ喰ひ足らぬ所があるから、更に進んで世の中に汎
 く自家廣告をなさねばならぬ、處が醫師法では、誇大的廣告を禁じてあるから、いか
 に鐵面皮のしれ者でも、法に問はれては困るが、しかしそこがそれ、裏に裏があり、
 底には底があると云ふもの、新聞雜誌記者にツテを求めて其奴をうまく掌裡の物とな
 し、黄金といふ良心麻酔薬を嗅がせて、其の新聞雜誌を巧に利用し、自身の虛名を廣

く世俗間に知らせる様にたくらむのである、例之ば『如何にし、神經衰弱を豫防すべきか』とか『夏季に於ける小児の手當』とか云ふ様な、俗人向きのする題目を撰びて麗しく何々醫院長の談話と書かしたり、又は自身で筆を執つて『不老長壽説に就て』『西瓜と腎臓病』てな様な大向ふの歓迎を博しさうな事柄をさも知つたか振に書きちらすのである、其の他通俗雑誌の衛生顧問となつて、毎號其の稱號姓名を掲載せしむるのも、亦自家廣告になる。

此の如くにして、漸次其の名を俗間に知らせしむるやうに努め、又一方には、出入りの八百屋、肴屋に至るまでうまく懐柔して、恩を賣り、いかにも人格の正しく品性の高潔なる者のやうに思はせて、それを世間に吹聴せしめる、又初めのうちは研究と確して下等社會のもの共を引き寄せ、一切無料で診察投薬してやる、他にも十錢二十錢のいした金を呉れてやつて、難有く感ぜしめ、益々自家廣告の範圍を擴張するやうにする、恚う云ふ風にあらゆる方面から、秘術をつくして掛ると、半年一年ならずし

て、世間に其の名が知れ渡つて、患者が絶えず、其の門を出入りするやうになる、モウ斯うなれば占めたもので、これより後は、臨機應變の手續を發揮するが可い。以上は、患者吸收の傳授だが、さて患者に對しては、如何にせば可いかと申すに、それにも色々の傳授が御座る、其の中にも是非心得て置かねばならぬことは、成るべく不得要領に出ること、これが流行醫になる秘訣の一つである、患者の得心するやうに不必要な箇所までも診察して、あの先生は鄭寧に病氣を診て下さる、まことに有り難いと云はせるやうに持かけるのは、固より言はでものことであるが、併し其の病名に至つては、たとへ解つてゐても成るべく不得要領にして置く方が、却つて患者の氣に入る、素人に能く通ずる症候的病名さへ言つて置けば患者の方に早分りがして、それで安心するのみならず、あの先生はなか／＼見立てが上手ちやと感服するものである、熱があつて咳嗽が出る患者ならば、風邪、胸がつかへて食氣が進まぬ患者ならば、胃病、腹が痛んで下痢する患者ならば、腸の病、筋肉に疼痛を訴ふる患者ならば、

「リョーマチス」、婦人の生殖器病は血の道に「こしけ」とさへ云つて置けば、間違ひはない、素人に通ぜぬ陳腐漢の六づかしい病名をならべては、患者のお氣に召さない、此の呼吸を心得てゐさへすれば、素人を翻弄し信用させることは容易なことである、然るに世の中には馬鹿正直な醫者があつて、此様な秘訣を知らせず、ありの儘に觀た所を明言して直ちに要領を得て了ふので、患者を取り遁すことになる、例之ば肺結核患者を診察して、ありのまゝに結核と云つて仕舞へば、患者の方では非常に心配し出して他の醫者にも診て貰ふやうになり、折角自分のものにしたお得意を他人の手に渡して馬鹿を見るやうなもので、恚う云ふ場合には、ことに例の不得要領主義を發揮し、空氣の通ふ路が少しく痛んでゐるのだとか、氣管枝に故障が出来てゐるとか位に言つて置いて安心させ、他の同業者に奪はれぬ様、豫防線張つて置くのが肝要である、胃癌の如き患者に對しても此の流で、當分は慢性的胃病と稱して、少しも要領を得させず、愈々末期に近くなつた時、始めて本音を吐き、「慢性的胃病が、癌に轉症したも

のと見えます、かうなれば、胃腸の専門家に診て貰ひなさる方が宜しいでしやう」と遁げて仕舞へば、誤診の咎を受けずに済み、又他の同業者に其の後の責任をなすり付けて、うまく腎喰ひ觀音をきめ込むことが出来る、こゝがそれ、「止めをば他人に譲る匙加減」と云ふものだ。

此の如くに患者に對しては、極めて不得要領の、チャラボッコに出づる他に、患者の死に目に逢はないやう、豫じめ注意して置かねばならぬ、いづれ早晚死の運命を免れぬ患者であつても、自身の診てゐる間に死なれては、患家の評判が悪くなつて、自然信用にも關するから、愈々駄目だと思ふが最期、早速腎に帆をかけて遁げねばならぬ、勿論其の場になつても、決してしつぽを見せぬ様、うまく辻褁を合はせて置くことを忘れてはならない、流行醫になる秘訣、分かつたか。

一一 金持醫者となる傳授

人生僅か五十年、脈を按じ、胸をたつき、腹を診たゞりてはよしや多少流行した所で、一代のうちに金持になられる筈はない、されば、白髪が生へぬうちに、ウント黄白を積んで榮耀榮華のありだけを仕たい望ならば、とても醫道だけでは駄目とあきらめるが可い、さればとて株式に手を出すのも考へ物、生き馬の眼球をさへ、くり抜きかねまじき蝸殻町北濱町の玄人を相手にして一攫萬金を争ふのは、お互の長袖にはなかく、容易なこととてなく、却て身上破滅の恐もあれば、先づ思ひ留つて然るべし、されど、拙者が今こゝに傳授致さんと存する醫者金儲の秘訣は、決してそんな危険なものでなく、うまく山さへ當れば、二三年の間に、身代をこしらへ、色の蒼白い患者を診て、うるさい小言や泣き言を聞く世話もなく、ノホ、ンで、此の楽しい世を渡つてゆくことが出来ること云ふ妙法で、南無妙法蓮華經の功德よりも、遙かに現世御利益があるから、金儲お望みの方々は、早速此の虎の巻を體得して信心遊ばすが可からう、さて其の妙法と云ふのは、他でも御座らぬ、最少の勞費を以て最大の效果を得るとい

ふ一般經濟學上の原理と實際上の原理を實際に活用した新發明の一つであつて、原價としては鑑一文に過ぎぬ位の者をも一圓二圓乃至五圓にて賣り飛ばすことが出来るのであるから、世上恐らくは、此れ程の大儲けはあるまい、其の方法は、ハテさて何でもないこと、糠汁や、豆の粉に「ベリベリン」とか「ネアーストフ」とか云ふ様なコケおどしの片假名の名前をつけ、脚氣の特効薬の、新滋養素のと、大法螺を吹き立て、金の欲しさうな博士や學士に若干の「コンミツション」を呉れてやつて、何々博士、何々學士の實驗と、飽くまでも手前味噌を大袈裟に廣告し、薄のろの醫者や、俗人共の視聽を惹きつけて、十瓦一圓、五十瓦五圓と、藥九層倍處か、百層倍數百層倍の値段で盛んに賣り飛ばして御覽じろ、また、く間に大儲けをして數萬數十萬の財産が出来ることが、太鼓大の判を押しても、ズツと此の法が安氣で、萬が一損をした所が高が知れてある、何にしる原料が、糠汁や豆の粉だから、それよりも尙ほポロイのは、血清の賣り出しである、但し、いかめしい藥院を建築

するに相應の資本がいり、又馬を飼養するにも、多少の金が掛るけれど、ロハで取る馬の血液が、僅か十瓦位でも、三圓五圓に賣れるのだから、糠の汁、豆の粉の新薬、ポロイ儲けに相違ないが血清が尙ほ一層ポロイ、そして血清の中でも、世間に多い病氣に用ゆるものでなくては、賣れ行きが面白くないから、結核血清、窒扶斯血清とか云ふやうな種類を製造するに限る。功が在らうが無からうが、そんなことは、どうでも構はない、例の何々博士の研究的發見と銘を打つて、無二の靈藥特效藥と、大風呂敷をひろげ、新聞雜誌屋を買収して提灯を持たせるのは勿論、澤山醫者の寄り集まる醫學會には進んで出席して『余の創製せる治療血清の効果に就て』とか『余の治療血清に由りて治療せる結核病患者の統計的報告』とか云ふ様なスバラしい演題の下に飽迄も鐵面皮に大法螺を吹き、聽衆を煙に捲いて、手前味噌のありだけをならべ立つるのである、有り難いことには明盲千人の世の中とて、新聞の提灯や、學會の大法螺を本統にして我れ一に争ひ求むるやうになるは、言はずとも知れしこと、ナンと旨い金

儲の妙訣でないか、早く大儲けをして一生安樂に暮らしたいならば、私立血清藥院を建てるに限る、これで山が當つて、ドツサリ金が出来たら、傳授料として拙者に其半分位は寄贈し玉へ。

三 患家にうまく取入る傳授

將を獲んと欲せば、先づ馬を射よとあるが如く、患家にうまく取入つて、之を永久の得意先とするには、先づ第一番に細君を自分の味方とするの要がある。女と云ふものは、元來近眼的動物で、眼前の事柄より他に見えぬ癖に兎角何事につけても出しや張り、其の意の如くに亭主を操縦して、家庭内に權力を揮ひ、其の小なる虛榮心を満足させてみたいのが、細君氣質といふ者、されば『サイノロヂスト』の鼻の毛の長い御亭主殿であるならば、何もかも山の神の云ひなり次第になつて、唯虚器を擁するばかり、一切萬事は鼻左衛門の纖手によりて決定せらるゝと云ふ有様、又それほどの鼻

下長でなくとも、うるさい小言や、つまらぬ小理窟を聞くが嫌さに、大抵のことは、主婦の意に一任して、其の感情に逆らぬ様、敬遠主義に出づるが習ひである故、主婦はつまり一家の女王殿下で、此の殿下の逆鱗に觸れたが最期、忽ち其の物凄く眼で睨まれて出入を差しとめらるゝは、獨り八百屋魚屋呉服屋ばかりに非ず、醫者も亦同様の運命に陥りて、べそをかゝねばならぬ事と知るべし、一廉の學醫先生でも、細君のお氣に召さぬならば、忽ち排斥を喰ひ、『ね、貴人、あのお醫者は、學問が在るかも知らないが、何だか頭が高くて、イケ好かない奴ね、わたしあんな高慢ちきな醫者は、蟲が好かなくつてよ』とか『あのお醫者は、無愛嬌で、無口で、氣心が分らないわ、わたし嫌よ』とか云ひ出して、大事の生命を託すべき醫者を選擇するさへ、一感情から割り出すといふ有様である故、患家に取り入らうと思へば、イヤが應でも先づ女王殿下の歡心を買ひ、自己掌裡のものとして置かねばならぬ、例之ば、主婦が當世式のハイカラで、ヒネクレた新派の歌でも詠む者ならば、心の中では、此のお轉變

の下手糞がと思つても、表面では、ヒドク感心したやうな顔を装ひ、『奥さんのお歌は、實に情趣が豊溢で、思想が崇高でいらつしやる、與謝野晶子も跣足ですよ、私も新派の歌が好きでしてね』など、持上げ、又三度の食より芝居の好きな者ならば、『奥さん今度の歌舞伎を御覽でしたか、歌右衛門の女鳴神は、いつ見てもいゝですな、羽左衛門の切られ與三に松助の蝙蝠安、相變らず旨い者ぢやありませんか。今度大阪から参りましたあの右團次ね、上方役者だから、臭い所もありますが、トコトンが十番ですから、一寸見られますよ、奥さん、どうです、是非一度往つて御覽なさい、妻もお伴致しますから』てな様な甘つたるいことを云つて御機嫌を窺ひ奉るのである、恁う云ふ風に、それ〴〵まく撥を合はせて、細君の趣味や嗜好に投ずるやうにすると、自然其の氣に入つて、學問伎倆は恠しくても永くお出入りが出来るやうになる、されば醫者も、専門的手腕だけでは、到底駄目で、是非其間的手腕をも要する譯である、女を操縦するのは、一寸六づかしい様に見えるが、併し其の方法次第で、

手の内に丸め込めて了ふことは、たいして困難なことで無い。そこが女の淺薄にして
 與みし易い所である。

細君の他に看過すへからざる者は、子供である、焼野の雉子夜の鶴、親の心は闇な
 らねど、子を思ふ道に迷ふは其の通性、そこが親馬鹿の親馬鹿たる所以であるから、
 藥の附けやうも無き馬鹿低能の鼻垂れ涎くりでも、我兒となれば、親の慾眼から又何
 處かに取り柄のあるやうに見えるもので、惚れた女の痘痕が笑凹のやうに見えるのと
 同じ格である、それ故、親の前では、どんな子供でも譽めそやすことを忘れてはなら
 ぬ、鈍栗眼の憎くくしい腕白小僧でも、本統に凜々しい活潑な善いお子様ですね、
 結構々々と持ち上げ、風が吹けば飛ぶ様な血の氣の無い弱蟲でも、此のお子さんは温
 順で可愛らしい、結構々々と何でも結構づくめで、譽めちぎると親馬鹿の悲しさは心
 でもない空世辭とも覺らず、眞に我兒を譽めて呉れたものと信じて顔の相好を崩し、喜
 ぶこと一方ならず、あのお醫者さんは、氣心の善い、物のよく分つた人だと、歡待す

るやうになるのは請合である。

それから、主人に對しては、其の性質や、趣味に應じて、それ／＼變通自在の妙策
 を講じ、うまく調子を合せて其の意に迎合すべきである、殊に堅門徒、法華凝り、ア
 ーメン狂ひ、淨瑠璃天狗、骨董道樂等の如き主人ならば、其の道に由つて、手の内に
 丸めこめて了ふことは、何の造作も無いことである。

此の如く諸方面より秘術をつくして掛れば、患家より見離さるゝ憂もなく、ポイコ
 ット喰ふ心配もない、醫家自衛策亦難い哉で、特殊の社交術處世術の心得無い者は、
 到底成功の見込みが無いから、醫科大學を始め醫學専門學校には、斯道の造詣深き流
 行醫を講師に聘して、醫家社交學の講座を新設したら、甚だ好都合であらうと思ふ。

四 患家の信用を得る傳授

何事も信用なくては、世渡りの出來ぬ今日、まして大事の生命を預かる醫者には、

是非共信用なかるべからず、と、今更まじめな顔して説き出すまでも無いことであるが、併し此の信用といふ奴、容易に得られそうで、其の實中々得難いものである、學問もあり、腕もあり、其の上人格が崇高で、何事にも行き届き、親切鄭重此上なければ自然に患家の信用を受くること、生洲で魚を捕へるよりも容易であるが、併し此様な者は百人中に一人もなく、大抵の連中は何れも鈍栗の脊くらべとても云ふべき有様である故、患家をして充分に信用させるには、矢張り手練手管が必要である、何がさて明き旨の多き世の中であるから、世辭で丸めて愛嬌でこねて、あらん限りの巧言令色的秘術をつくし、搦手より打つて掛れば、敵壘を陥れて我が物に占領し得らる、こと期して待つべきやうなれど、さて其の秘術といふものに種々あつて、孫吳の兵法も管ならず、個人々々の性格や氣質により、帷幄のうちに運らすべき謀計も、自から異ならざるを得ぬ、昔は醫は衣なり威なりとか稱し、美衣を身に纏ひて、威嚴をつけ、患者を信用せしむる手段の一となしたもので、今日に於ても尙ほ依然として行は

れてゐるけれど、文明の進歩と共に普通教育の普及した大正の今日、いかに明き旨の多き世の中なればとて、美衣美服で外観ばかりを装ふても、沐猴にして冠する者ぢやなからうと、疑ふ者もあるべく、馬子にも衣裳など、嘲る者もあらう、ここに於てか、コケ威として肩書なるものが必要となつてくる、なまじひに普通教育を受けた者が世の中に多くなつてきた爲め、大學卒業の學士とか博士とか云ふ肩書のある者は、凡て學問博く伎倆すぐれたる大醫名醫のやうに心得る有象無象が多いから、低能愚鈍の馬鹿殿様でも、伯爵子爵の肩書で、何となく偉そうに見ゆるが如く、大學在學中數回以上も落第した揚句、教授の御慈悲で、ヤツと卒業させて貰つたデモ醫學士でも、洋行して其の國の醫學者に論文を書いて貰ひ、それで首尾よく學位に有りついたデモ博士でも、僅か三字四字だけの肩書で、俗人に信用せられると云ふ滑稽な世の中ゆゑ、どうしても吾れ自から金箔をつけて、身より後光がさしてゐる様に見せねばならぬ、されば大學卒業の學士、博士でも無き普通の醫者は、是非共適切の手段を講じて學士

博士と同格乃至それ以上の偉らい人間のやうに世間の體裁を繕ふ必要がある、拙者ここに腹藏なく其の秘傳を傳へ申すから、有り難く聽問召され。

先づ、もと手を餘り要せざる手輕い所からお話し申さう、其の中でも取りわけて田舎の醫者に最も適切と思はるゝは、毎年四月花のお江戸に開催せらるゝ、醫學會の大會には必ず出席することである、そして歸郷してから、田五作、太郎兵衛、權兵衛等に向ひ得々として、何々博士何々教授と親しく膝を接し、學問上に關する談話を交換して大に利する所があつたとか、或は大學病院、順天堂病院等を參觀して、大に見聞を擴めてきたとか、見え透いた法螺でも何でも構はず、當るにまかせて滔々と吹き立て囃し立て、田五作、權兵衛共を吹き飛ばすべし、「おらの村の先生様も、偉らいお方にならしやつた、おらも、これから先生に診て貰ふことにすべえ」と信用するやうになるのは請け合ひの西瓜である、それから時日と金とに多少の餘裕があるなら、矢張り上京して、北里研究所に三ヶ月の講習を受けにゆくが可い、北里といへば、兒童

走卒でも其の雷名を聞き知り、世間を知らぬ田舎者などは世界第一等の大醫のやうに信じ切つてゐるから、たつた三ヶ月の講習でも北里博士の門弟といへる肩書さへ出来たら、占めたもの、須らく其の肩書を到る所に振りまはし、遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて眼にも見よ、吾れこそは世界萬國に大名響き渡れる北里大博士の門人なるぞ、と盛んに名乗りを上げて、田舎者を威どしつけるが可い、村中第一の名醫にあがめ奉て呉れるのは、今更申すも野暮である、ナント適切な妙案でないか。

以上は、田舎むきのお手輕主義であるが、今度は一步を進めて、都會むきの奴を御話し致さう、素より、之れには多少の金がいるから、豫じめ其の積りてゐて貰ひたい、先づ、誰にでも出来るのは、市會乃至府縣會議員の選舉に打て出ることである、そうすれば、新聞屋が、業々しく書き立て、呉れるから、廣告代を拂はずとも、其の名前が自然に世に弘まる譯で、議員選舉に打て出づる程のお醫者であれば、どこかに偉らい處があるに相違ないと、世間の明き盲共は自分勝手に推量して信用するやうに

なるに極つてゐる、それに萬一當選でもしたら、何々議員といふ一廉の肩書が出来て、市長や知事を恐れ入らせ、公私の宴會には、いつも招待せられて、大層羽振り利くから、愈々有象無象の信用を博し、病家先さも自然に殖えてくる道理である、もと手入らずに自身の名前を世間に賣り弘め、おまけに患家の信用をも博する妙案は、多少の金が掛るけれども、此の如く市會或は府縣會の議員となり、團十郎ではないが到る所に大眼玉をむいて、世間の明き盲共を恐れ入らせるに限る、此の他にも種々の名案があるが、其の中にも最も簡便で、而かも最も素人の信用を買ひ易いのは、内容は頗るお粗末でも、素人に取りては多少の心得となる様な薄べらな通俗的醫書や衛生に關する書物を自費で出版し、金文字の光燦然たらしめたる上にも、知り合ひの醫學博士の名を借り受け、いやと云ふ程、著者を褒めそやした手前味噌たつぶりのお手製の序文や跋文を前後に附したのを、患家へは勿論、金のあり相な懇意先さへ進呈し、一方には、新聞紙上に大袈裟な廣告を出して、『學理に通じ、經驗に富み、篤學にして且つ

人格高き何々醫院長何々先生の新著』などと特に世人の眼につき易きやう、三號二號の大活字で廣告するが可い、書物の廣告だから醫師法に抵觸する氣遣ひは無く、最もよく自家廣告に適する安全至極の妙案であるから、患家を始め、愚俗の素人を瞞着して信用させたい望みがあるなら、須らく此の手段に出づべきである。

當世七外道醫者

一

あのお醫者様は邊幅を飾らず、至つて質朴實直の人のやうに見ゆれば、朴訥仁に近かしたとやらで、定めて仁術も上手なるべく、貴重の生命を託しても大丈夫なるべしと兎角表面から見えて皮相の見を抱くが常なる世俗の人々に評判させ、外見に無頓着なる風變りの醫者といふのを看板にして、患者を吸ひ寄せんと魂膽から、わざと糊硬き

三つ紋附きの木綿羽織を裾短に着流し、紺色の兵子帯を無造作に締めて、洗ひしやれた小倉袴、頭をもいが栗坊主にして、いかにも脱俗したる醫者のやうに見せかけ、往診の折にも、三四十錢位の安物の烏打帽子を阿彌陀に戴き、自用車をこと更に帳場の車夫にひかせて患家に乗り込み、わざとお國訛丸出しの言葉にて、御心配に及ぶことは、ごは、ん、大船に乗つた氣でいなさるが可かと張り切らんばかりに脂肪分多きふくれ面に微笑を湛へながら言葉巧に患者を籠絡し、朴直でしかも親切な當世には珍らしいお醫者様と病家に信用させて、人氣を賣らんとする外道面、其の憎さげなること嘘へんに方もなし、然るに此の外道脱俗せる醫者の如く見せかけて、其の實は至つての慾張りなるが上にも大の吝嗇にて、出すことなら舌を出すも嫌ひ、取ることにかけては馬の糞をも拾ひかねまじき男なるが、此様な奴に限つて妙に女好きにて、人目を忍んでの惡所通の折には、一寸意氣な黒絹の羽織に着かへ白縮緬の兵子帯に、鍍金の鎖を光らせつ、どうぢや、おれの言ふことを聞かぬかと、どん栗眼を細くしながら、女に

しなだれ掛り、お冗談なすつちや、イヤですよ、あたいやらしいと見ごとに肱鐵砲を喰はされて、フケだらけのいが栗頭かきつ、悄然と罷かり下がつた不首尾の外道面、見てやりたかりき。

二

僕が洋行中は、獨逸にゐた時は、と二言目には洋行と獨逸とを持ち出してさも自慢らしく吹聴する外道、ストラスブルグ大學の病理教室に居つた時分、プロフェッソールのキアリーと『アルバイト』のことから意見が衝突して、伯林大學に轉じ、オルトの處で、『アルバイト』を完成したが、僕の語學に熟達してゐるのには流石のオルトの奴も非常に感心したつげとか、ミュンヘンの婦人科の『クリニック』を素見半分に見て見た所が、デーデルラインの奴、案外に話せるので、一週間ばかりも滞在して、見學してやつたことがありしとか、口から出まかせの見え透いた駄法螺を吹き、一轉

して我國の名流を批評しては、フ、ン青山かい、あいつが何を知らず、北里は山子が當つたばかりだよ、と口ぎたなく罵りお山の大将乃公一人といはん許りの面憎くさ、其くせ、自身の名を署したドクトル申請の獨逸文が其實留學中人知れず大枚三百『マルク』も出して、さる獨逸の醫者に書いて貰ひしことゝて碌さまに讀めず、先生、此處は何と譯してよろしいとかと人に問はれて、自身の論文でありながら悲しやわけ解からぬ苦しきまぎれに、ウ、此一節は僕が特に骨を折てわざと六づかしく書いてみた所だから、語格の丸つきり違つた日本文に譯することは困難だよと言葉巧みに相手を煙に捲いて、其あとでは赤い舌をペロリと出し、してやつたりと苦笑する外道面の憎くしき、痰でも吐きかけてやりたき程なるを、世間には明き盲共の多きことゝて、此外道の大法螺を誠に受け、新知識に富めるが上には獨逸語に巧みなる花形のドクトル様と一圖に思ひ込みし某商人、さる商業上の都合にて是非或る獨逸の商會に照會文を出さねばならぬことあつて、外道を訪問し、先生甚だ御無理な御願ひで御座りますが、

これゝの要件で、直接に獨逸の商會に問ひ合せ致し度きことの御座れば、一寸其用向きのあらましを御したゝめ下さいませんかと腰低く頼まれ、獨逸語はお手のものと云はん許りに世人に吹聴してゐる日頃の手前且つは内かぶとを見透かさるゝ恐れもあれば、宜しい、左様なお頼みは何でもないこと、今直ちに書いて進ぜたいが、これから病家を往診せねばならぬ故、今晚使を寄こして下さらぬかと、うまく相手の男を瞞着して歸へした後、サテゝ困つたことが出来たわい、と兩腕組みながら一思案、暫らくして突然膝をうち、あるわゝと打ち笑みながら、車夫を呼び、南江堂へ原譯對照の尺牘文例書を買ひにやり、商人から頼まれた注文書に類した所を書き抜きて、ヤレゝこれにて安心と胸を撫で、待つてゐる所へ、刻限の時刻となり、商人の使者來りければ、大きな顔をして持たせて歸へしたまでは萬事都合よく運びしが、二三日の後復も右の商人訪ひ來り、恭しく前日の禮を述べた後背後に控へし同道の獨逸人を紹介して、此のお方は手前と昵近の某『ホテル』に滞在中のお醫者様とのことですが、

是非獨逸語の上手な日本のお醫者に面會していろいろ話がしてみたいと、ボーイに仰しやつたとかて、幸ひ今日手前が『ホテル』に参りました所、かねて手前が先生とお心易いのを『ホテル』の主人が存じて居りますので、どうか此のお方を先生に紹介して上げてくれとのたつての頼み、それ故御多忙中をも顧みず、同道して参りましたやうな次第、承はりますれば、此お方は先生の御留學遊ばしたミュンヘンのお産れと云はれて、外道先生心のうちに飛んでもない奴が來やがつてのこととて御座いますと、云はれて、外道先生心のうちに飛んでもない奴が來やがつてドエライ困つたことになつてきたぞ、手紙の方は首尾よくしつぽを見せずに胡麻化してやつたが、獨逸人に面と向つての會話はたまらぬたまらぬと、淋漓として流れ出づる脊の冷汗をひそかに拭はんとする折しもあれ、獨逸人は滿面に愛嬌を湛へつゝ、外道の前に進み、握手を求めながら、初對面の挨拶をすませて後、いと口早に何か語り出すにぞ外道の耳には何のことやら、薩張り聞き取れず、折り折り『イヒ』『ドイツチュ』『ミュンヘン』と云ふ位が漸くわかる許り、眼の玉を白黒にしながら、唯當て度もな

しに『ヤー』『ヤー、ウォール』を連發し、『貴下の御多忙なるをも憚らず、推參致せし段何卒御海容あれ』との先方の詫び言葉に對して『ヤー』と答へし大しくぢり、腹の皮がよれる許りなり、『承はれば、貴下は多年獨逸に御遊學になつたとの事、定めて獨逸語は御達者で御座ろう、拙者は卒業してから漸く三年を経た許りの青二歳の庸醫で御座るが、何か有益なる御實驗談でも御聞かせ下さらば誠に難有き事で御座る』と切り出され、これにも同じく『ヤー、ウォール』とやつたので、獨逸人は膝をすゝめ『然らば何かお話しを』と請はれて、これにも『ヤー、ウォール』だけ、始めから『ヤー』と、『ヤー、ウォール』との一手専門のみにて顔には玉なす汗だらりと流れ、徒らに口をもが／＼さすのみなるに、獨逸人は案に相違して手持不沙汰の態、紹介者も變な顔をしながら、外道の面をながめて『オヤ／＼／＼』

色生白きお平の長芋然たる顔に、顕微鏡でなければ見えぬ程の薄髭をはやし、頭髪は揉上げを短くして、わざと右より左に分け、おまけに焼きごてを當て、縮れさせた上に胸の悪くなるばかりなる香の強い『コスメチック』をドッサリ塗り付けたいやらしさ、黄金佛のそれならなくに、金縁眼鏡、金の入歯、金鏈、金の留針に金指環と、勿體なや鐿一文の値もなき安っぽき體に、金光を輝かせて、イヤに見榮を飾り、外出する折には貴婦人好みの踵の高く先きの尖つた護謨靴を穿ち、佛蘭西型の意氣な脊廣に猩紅色の『ネクタイ』と云ふ扮装、一見して嘔吐を催ふす許りなるに、うろ覚えの獨逸語をのべつに亂發して、君、今日は『ウエッテル』が『シエーン』で、『アングネーム』だから、向島邊へでも『スバチーレン』して、『ツーリユック』する時には、何處かて、『トリンケン』しやうではないかと、日本語で十分に意の通ずる普通の言葉にでも無闇に獨逸語を使ふ氣障加減、實にたまつたものに非ず、されど本人はこれが大得意なりとは、さて、世の中には困つた奴もあるものかなと可笑し、此外道、大の見え坊

なるに搗て加へて野心深く、おのが受持の病室に金持ちらしい患者を見つけ出すが最期、診察に言を托して用もないのに屢々出入し、口から出放題のお追従をならべ立て、七重の膝を八重に折て御機嫌伺ひ、病院の醫員を辭して開業する曉には此患者を何か物にせんとの下心を胸に包み隠して世辭愛嬌を矢鱈に振りまく封問氣質油斷のならぬ輕薄醫者よと、蔭で噂せらるゝも知らずに、あの患者は餘程吾輩にまいつて居ると、獨りて自惚るゝ外道面、唾でも吐きかけてやりたき程なり、或日素封家の若後家の色香うるわしきが入院せる由を聞き込みし外道、自身の受け持てもなきに、手蔓を求めて入り込み、持ち前の追従と愛嬌とてあはよくば、後家をたらし込んだ上、小遣ひ錢をせしめてやらんとの色と慾との二筋道、男地獄に等しき根性から、人なき折りを伺ひて、鐵面皮にも忍び入りしを患者より見事に刎ねつけられ、剩さへサンザンに罵られ辱しめられ、低頭平身して幾度も謝罪の後面目玉を踏み潰して引き下つたことが、やがて院長のお耳に達し、非常に油を取られしのみか、放逐の憂目に逢つた

とは、さても氣味よき事どもなり。

四

諸君！、醫學者たるの眞價は其『アルバイト』の如何に依つて決せられるのである、假令ひ博覽強記の者であるにした處が、『アルバイト』無き輩は骨董的人物と云つて宜しい、蓄音機と稱して宜しい、諸君は、『ウイッセン』Wissonの人たらんよりも『ケンネン』Konnenの人とならなければならぬ、書齋の人たらんよりも研究室の人とならなければならぬ、『アルバイトズフト』の人とならなければならぬ、然るに諸君！吾邦の醫科大學教授と稱する手合の中に果して大『アルバイト』を有する者があるであらうか、否な吾輩の見る所では、彼等に別にこれと云ふ『アルバイト』さへ持つて居ない、唯『メモランド』を十年一日繰返しつゝある一種の蓄音機たるに過ぎぬのである、此の如くにして果して大學教授として傲然他を睥睨することが出来やうか、眞個

の學者と稱することが出来やうか、諸君！吾邦の醫界は、實に此の如き憐れなる有様であるのである、苟も吾邦の醫學を進歩せしめて世界醫學の發展に貢献する所あらんとするには、是非共『オリギナル』の『アルバイト』を出して世界の學者と共に『プリオリテート』を争ふまでに盡瘁努力せねばならぬのである、抑々吾校の方針は……と説き去り説き來たりて意氣昂然滿場をねめ廻してグッと反り身になつた所は、音羽屋——と聲をかけた位、自身の『アルバイト』の杜撰誇張なるを棚に上げ、口に税のかゝらねのを幸に大法螺吹いて『アルバイト』の、へちまのと勿體ぶり、學者の眞價は『アルバイト』にあり、諸君努めよやとは、お臍に茶がわく次第なり、『アルバイト』なき人間が骨董的人物又蓄音機の類ならば、お手前は詐欺的人物か法螺貝なるべし、毎年四月の學會期日に迫りて、思ひ出した様に『アルバイト』の製造に取りかゝり、盗人を見て繩紮ふと同じく、あはて騒ぎで粗製の『アルバイト』を半月か一ヶ月のうちに仕上げて了ひ、之にいろいろな小刀細工を施して、何々の實驗的研究

とが云ふ様なさも高尚らしい表題を冠せしめ、厚がましくも、神聖なる學會にのしやばり出て、余が多年の研究成績に依ればなど、先づ大向ふの荒膽を挫き得意の辯舌を鼓しつゝ、嘘と誠との使ひわけ、見てきた様な嘘をつく講釋師のそれならで、實際爲した如くに上顎と下顎とぶつかり次第の出鱈目を並べ机の上で拵へた統計表を幾枚となく正面に張りつけて、さてさて綿密に研究したものだ、感心々々と、内情を知らぬ聴衆を恐れ入らせ、蔭へまはつて短い舌をペロリと出して、ウフ……吾輩の演説はうまからうとは、恐れ入りたる次第なり、抑も此『アルバイト』外道の研究方針は實驗に着手せぬうちから、既に結論が出来上つてゐるのなれど、唯人眼を繕はんがために、試験管を振り、動物を殺すと云ふまで、いらぬ入費と無益の殺生にあたら時間を潰すに過ぎざれば寧ろ、始めから何もせずに結論だけを書いて置く方が經濟と云ふものなり、研究家に化けた古狐、何を喋るやら正體の知れたものに非ず、宜しく眉毛に唾つけて聞くべきものなり、笑止々々。

五

『女醫はみな眞ひ手の無い顔ばかり』とは、ドクトリンに對して無禮至極の言ひ條とは思ひながらも、さて御本尊に拜謁してみれば、げに尤もと首肯る、杓子面を誰に見しよとの薄化粧、水腫の病人のやうに、ぶく〜と膨れ上つた五體をば、風通の御召しに包みて襟から胸へは二本立の金鎖を光らせ、藍鼠の袴を胸高に穿ちたる扮装だけは稍々見事なれど、お國訛に下司な江戸ッ子辯を交へて、看護婦に意地わるく當り散らす物の言ひ振は、お里が知れて笑止千萬なり、専門は婦人科産科とあれど、同性は兎角反撥し易く年若き女患者の訪ひ來れば、容態よりも先づ衣裳髪飾の模様を底氣味わるき金壺眼でねめまわして、時候遅れ、裝飾でもして居れば、心のうちで、フ、ンと笑ひ、眼の眩むばかりに綺羅をつくしたるが上にも姿容うるわしきものならば、忽ち嫉視の眼光鋭くひかりて、兎角言葉の裏に針をつゝむが女の數に漏れぬドクトリン

の習ひとて、おのづから女患者の足が遠くなり、門前雀籠を張らんとする勢なるに
 搗て加へて二三人あまりも抱へこんだ男妾どもには扶持をやらねばならず、見榮も飾
 らねばならぬ始末に有髻男子でさへ、生活難を訴へ勝なる今日此頃の世に、況して女
 の瘦せ腕とて思はしき収入も無ければ、大に困り果て、杓子面に生れずんば女優にて
 も商賣換へをする所なれど、お多福を小野の小町に變化し得るまでに科學の尙ほ進歩
 して居らぬ今日とて、詮方もなく、門戸を張りゐたるが、待てば海路の日和とやら、
 さる好色の博士殿が例の珍らし者喰ひの處から、此のドクトリンの杓子面を一見して
 御意に召したりと見え、婦人科會のありし時、患者の件に就て少しく相談したきこと
 があるからとの口實の下に怪しき所に引つ張り込み、猫撫聲で口説き立てたのを、胸
 に一物を藏するドクトリンは、直ちに首を縦に振り、好色博士を掌中に翻弄しつ、少
 からの金を絞り取つた腕の見事さはお顔の杓子面にも似ざりけり、然るに如何なる間
 違ひにや、其翌月より月經のとまりて身體にも異常をおぼえ、遂には酸い物を好む様

になりしかば、お手のものとして自ら診察しけるに案の如くなる妊娠に、こりや堪まら
 ぬとうろたへ出し、かねて心得ある墮胎法を施し闇から闇に血を分けた子供を葬り、
 口を拭ふて素知らぬ顔、表面では身持堅固のオールドミスらしく見せて、女性の自覺
 の、婦徳のと鹿爪らしい長談議、一體どこを押せば左様な音が出るやらと可笑し。

六

ウアハ、、、君はまだ大に若いよ、研究的態度を執て病人に臨むナンテ、一
 體何を言つてるんだ、そんなことは大學あたりの先生方の仰つしやることだよ、お互
 ひに病人に薬を賣つて飯を喰はねばならぬ町醫者じやないか、研究も糞もあつたもの
 かい、患者をうまく籠絡して、親切ごかしに薬を賣りつけて、纏つた金でも取らぬこ
 とには自用車夫の月給でさへ拂ひかぬる境遇でありながら、オツニ高くとまつて研究
 なぞとはお隣に茶が沸くよ、ウアハ、、、僕なんか君のやうな頼馬な真似はし

ないね、一寸した結膜炎の患者でも、胃が悪いから眼に來たのだと尤もらしく言ひ聞かせて、點眼薬、巻法劑の他に健胃劑をも賣りつけ、おまけに通じも能くせねばと毒にもならぬ緩下劑さへ與へるやうにして、薬價をウンとせしめるね、ナニ、そんな事をしては、患者に氣の毒など、ウアハ、、、、馬鹿正直なことを云ひ玉ふな、君は一體吾々町醫者を何と心得てゐるんだ、一日分二十五錢にも當らぬ高の知れた薬價でエッセンしてゐる身の上ぢやないか、つまり薬賣りぢやないか、其薬賣りが患者に澤山薬を吞ますやうに仕向けて成るべく薬代を多く取るは當然だ、立派な玄關を張て書生、看護婦の三四人も置き相當に見榮を飾つて世間態を繕つて行かねばならぬ此のせち辛い世の中に、君等のやうな馬鹿正直では鼻の下の建立さへ覺束ないよ、聞けば君は此間、まだそれ程に進んでも居らぬ胃癌患者を診察して慥に胃癌なること疑ひなく候、今日の内科治療法では到底駄目にて候と正直に告白して、早く外科的手術をお受けなさる方が宜しう御座ると、病人の方から頼みもせぬにわざ／＼赤十字社病院

の外科部へ紹介したといふことだが、噫、開業術を解せざるの甚だしき何ぞ此の如くなるやと云ひたいね、ことにあの患者は三十萬圓餘りの財産家だそうだが、そんな善い掠鳥を手放して可ふなんて、君のお人よしにも呆れるよ、僕だつたら胃癌であることが解つてゐても中々本統の音は吐かないね、少し質のわるい慢性の胃病のやうですから、御本復になるには多少長引くかも知れませぬが、まあ氣長に辛棒して此薬でも召し上れと、例に由つて例の如く／＼の薬を献上に及ぶね、ナニニ向ふは金持だものいくら薬代を取つてやつても構やしないやね、愈々末期に近いた時になつて、そろ／＼本音を吐いて慢性の胃病から癌に變症したものと見えます、前以て少しく質のわるい胃病と申し上げて置きましたが、愈々癌に變症したとあつては、御本復の儀は或は六づかしからうと存じますが、一度胃腸病専門家の何々博士をお呼びになつては如何でしやうと、うまく患者に説き勸めて何々博士といふ奴に代らせ、其奴に責任をぬり附けて尻喰ひ觀音をさめてやるんだ、初めに少しく質のわるい慢性胃病で御座ると

言葉を濁らして置くのが、此方の奥の手だよ、開業術の秘訣は斯様な點にある、オイ君、解つかい、ウアハ、、、君なんか少しく書物を讀んだ男だから、觀察の、研究の、醫風の、へちまのと、イヤ勿體ぶつて學者君子めかしてゐるが、併し門前雀羅を張るやうな悲惨な有様では、いつまでも君子顔學者面をして居ることが出来まいじやないか、月謝は取らぬから遠慮なしに僕に開業學の要領を質し玉へ、いつでも丁寧に教へて進ぜる、一體君は無愛嬌でいかん、偏屈でいかん、そんなことでは到底俗人を相手にする町醫者商賣はつとまらないよ、ちと酒を飲むことを稽古して、冗談口の一つもきける様に發奮し玉へ、それから赤阪邊の不見轉でもいゝから、藝者買ひもして、少しは世態人情に通じて貰ひたいね、ウアハ、、、。

七

吾輩もやつと、博士になつたが、胸算用だけでも随分金をつかつたものだ、先づ洋

行二年半の費用が少く見積つてもザツト壹萬圓、プロフェッショナルやドチエントにいろ／＼の贈物をした代金や、論文を書いて貰つた報酬やらを合せて千圓餘り、伯林や巴里で發展の度が聊が過ぎた爲め友人から足らず前を借金したが、チヨツと五六百圓、それから歸朝して、博士の運動に取りかゝつてからいろ／＼の方面に費消した金が、先づ見積つて二千圓、開業の費用が全體で壹萬圓、總計三萬圓近くになつてゐる、しかもこれが悉く高歩の借金ときてゐるから、中々負擔が重いテ、それに吾輩は表面でこそ偉らそうな顔をして大家然と構へてゐるけれど、さらけ出して云へば頭は悪く腕も利かず、とても生存競争の劇しい同業社會に覇を争ふてゆける柄ではないのだ、己を知るものは己に若かずで、吾輩が博士になつたからと云つて、俗人の思つてゐる様な名醫でもなければ學者でもなく、つまり沐猴の冠するに過ぎないのは、實に恐縮千萬な譯さ、内科専門醫學博士何の某と多きな門標を掲げて居つても實の所は、内科の經驗としては殆ど無く、感冒の診斷さへ随分怪やしい方だ、それも其

筈、今まで試験管ばかり振てゐたのだから、洋行二年半の間プロフェッショナルとドチエントとにすがり付いて、漸く醫化學と細菌學とに關する二三の『アルバイト』を出したものの、多くはドチエント君の助力で漸く出来上つたばかり、論文とても、吾輩自ら『ペン』を執つて書いたのは、僅かに動物試験の経過なもの、それすら完膚なき迄に訂正せられたのだから、吾輩自身の論文でありながら實際意味の分らぬ所が多く、友人に質問せられて赤面するやうなことが、度々ある、それでも博士になることが出来たのだから、思へば、滑稽至極な譯さ、併し博士になつたが爲め、これ迄のやうに一回一圓位の往診料で、オインソレと御輿を上げて飛んでゆくこともならず、イヤに高くとまつて、重みを附けねばならぬので内實は大いに閉口して居る、それに開業してから早や一年以上にもなるのに、未だに思はしい患者先きも出来ず、門前たえず閑古鳥が鳴いてゐるが如き有様では、博士の肩書もあり頼みにはならぬテ、二萬圓近くになる借金と之に對する利子とが、いつ頃綺麗に返済することが出来るやらと思

ふと何だか心細くなつてきて厭世觀が起つてくるよ先日一患者を診察中に高利貸野深造奴が突然やつてきやがつて、元利合せて七百圓の金を今直に返済せぬことには執達吏を差し向けて諸道具に封印つけると大聲立て、怒鳴りこまれた時は、患者の前で低頭平身の醜態を演じて、博士先生も臺なしになつた、ア、情けない、田舎へても夜遁げして博士の肩書を振りまわし烏なき里の蝙蝠をきめ込んでやらうかとも幾度思つたか知れないが、あの慾野めに嗅ぎ出されて、又候怒鳴りこまれた日には、狭い田舎では尙ほ更のこと、吾輩の内情が忽ち世間に知れ渡つてどんな赤恥をかくやら分からねと考へ、火の車の苦痛を忍びながらも家賃百五十圓の此家に門戸を張て居らねばならぬ四苦八苦の境遇、よくも血の涙が出ぬことだ、一週間前、突然或豪家より往診を頼まれた時はヤレ嬉しや一年以來始めて福音に接したと胸を躍せながら、駆けつけた所、主人の獨り子で八歳になる男の兒が熱病に罹り、折り／＼痙攣が起つて重病らしいとのこと、早速診察はしたもの、小兒病に經驗なければハテ何病であらう、

脳膜炎かも知れぬと思ひながら其日はお茶を濁して歸り翌日再び往診した處が、熱は昨日より高く上つて三十九度八分、屢々全身搐搦が起り意識朦朧となつて折り／＼諸語を放つ有様に愈々脳膜炎と診断し、臍の緒切つて以來始めて百圓の往診料を懐ろにしてホク／＼顔で歸宅した迄は萬事好都合に運び、日頃の厭世觀も消え失せて、久し振りに酒に酔ふことが出来たが、あの物持ちの患家を此ままにして置いては非常な不利益、こゝは是非親切らしく見せて第一の得意先にせねばならずと欲得づくより打算して、二三日経つてから見舞の口實の下に往つてみると、思ひきや、脳膜炎と診断して、とても恢復おぼつかなしと明言し置きたる子供が、早や病牀を離れて噓々として元氣よく遊び戯れ居るので、オヤ／＼こんな筈はなし、人ちがひかかも知れぬと、腫を据えてよく／＼顔をながめても二三日前に診察せし男の兒に相違ないので、しまつた！と思はず口走り、穴でもあらば這入りたき程なりしを、漸く心を落ちつけて、挨拶を済ませしに、主人は大の不機嫌顔にて、先生の御診断は丸きり違つておましたよ、あな

たのお歸りになつてから、更に他の先生を迎へて、脳膜炎でないか否かを詳しく診察して戴きました所、其先生の仰しやるには、成程熱は高く精神も朦朧になつて痙攣も起つてゐるが、脈の有様や其他の容態がどうも脳膜炎らしくない、小供にはえてして、蛔蟲から、此様な病症が起ることもある故、一應鏡検してみましやうと、灌腸して大便を少し許りお持ち歸りになつた所、暫くしてお出でになり、案の如く澤山の蛔蟲の卵が見えました、御安心なさい、脳膜炎でも何でもありませんと、驅蟲劑を下さしましたので、其翌日から今まで大病とばかり思つてゐた病氣が夢の如くに平癒し、御覽の如く機嫌よく遊んで居ります、先生は博士でいらつしやるのに蛔蟲から起る病氣と脳膜炎との區別がお分かりにならんとは、一體どうした事です、そんな御方と知つたなら、大層な御禮までして御診察を願はなかつたら善かつたにと家族一同愚痴を溢してゐるやうな次第です、と真正面から切りこまれて、今更グーの音も出さず這々の體で遁げ歸つたが、其時ばかりは、命が十年も縮つたやうな氣がしたよ、桑原々々

こと、博士先生、太き溜息をつきながら、變な顔して鰻髭を捻り、煩悶懊惱の態たら、早取寫真にでも撮て、これが何々博士の肖像と世人に見せつけてやりたかりき。

藪醫者御文章（戯文）

蓮如上人の有名なる『白骨の御文章』を摸擬したる種々の戯文少からざれども、藪醫者を材料とせる戯文に至つては、尙ほ未だこれ無きが如し（余の寡聞なる故か知らざれども）されば一夜徒然なるまゝに駄作を試みつ、甚だ拙劣なれども、讀者諸氏のお笑草ともなれば幸甚なり。

夫れ人間の浮生なる相をつらく観ずるに、凡そつまらぬ者は、此の世に始終詫びしく暮らせる藪醫者の境涯なり、されば未だ流行したりと云ふことも聞かず、一生暮らし難し、今に至つて誰か百圓の収入にも有りつくを得べきや、我れや先き、人や先き、今日とも云はず、明日とも云はず、無分別に開業する者は、もとを減らし、末し

まひには、廢業するも多しと聞けり、されば朝には門戸を張りて、夕には夜遁げをするの身なり、既に馬脚あらはれぬれば、往診を請ふ者忽ち絶え、患者の足永く絶えぬれば、薬局に蜘蛛の巣張りて、書生看護婦も逃げ出しぬる時は、先輩友人をたよりて、歎き求むるとも、更に其の甲斐あるべからず、さてしもあるべき事ならねばとて、古道具屋に行て器械萬端賣り飛ばしぬれば、尙ほ借金のみぞ残り、馬鹿らしと云ふも中々おろかなり、されば藪醫者のつまらぬ事は、古今東西の定めなれば、誰の人も、夙に此の事を心にかけて、日進の醫學を深く研究して、大家となり申すべきものなり、あなおろか〜。（完結）

附 録 終

大正十一年四月一日印刷
大正十一年四月五日發行



間違だらけの油煉
定價金壹圓九拾錢
書留送料十三錢

著者 田中祐吉

發行者 濱井松之助

印刷者 赤羽正己

東京市日本橋區數寄屋町一番地
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發兌

東京市日本橋區數寄屋町
大阪屋號書店

電話本局三四七三番
電話本局一四三七八五番
電報本局一四三七八五番

東京洋印株式會社印刷

田中香涯先生著

間違だらけの衛生

定價金一圓九十五錢
書留送料

知識と趣味 人體に關する面白き話

定價金二圓八十七錢
書留送料

科學的新研究的 家庭新知識(1)

定價金七十錢
書留送料

同 (2)

定價金七十錢
書留送料

同 (3)

定價金七十錢
書留送料

科學上より觀たる 靈と肉

定價金七十錢
書留送料

人間の性的闇黒面

定價金七十錢
書留送料

東京日本橋數寄屋町
一三三七番

大阪屋號發行

(近刊)

60
725

終

